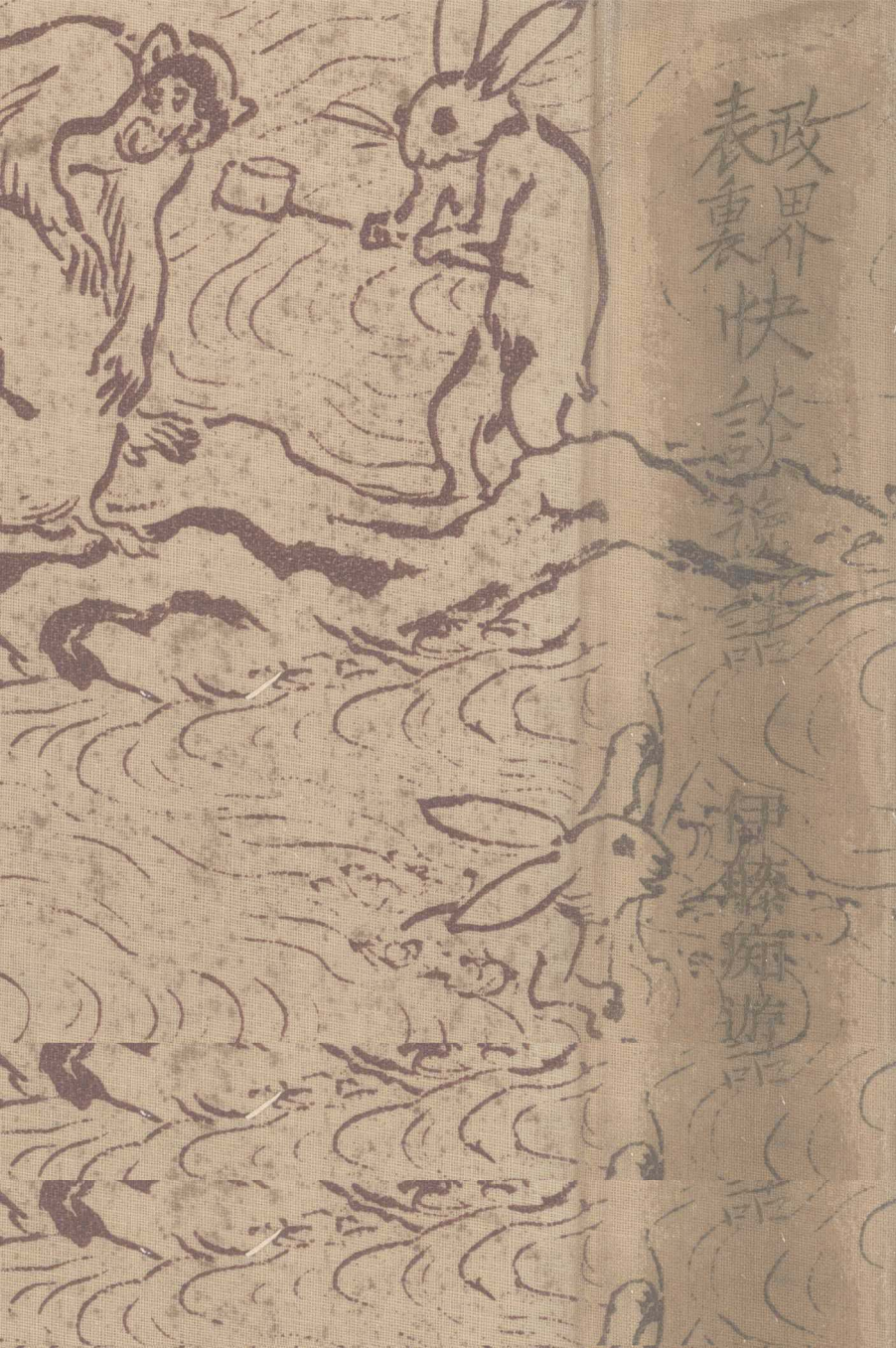


政界快談表裏

伊藤痴遊



伊藤忠遜全集

第十三卷

昭和五年三月十五日印刷
昭和五年三月二十日發行

伊藤痴遊全集 第十三卷

著者 伊藤仁太郎

發行者 下中彌三郎

東京市麹町區下六番町一〇

印刷者 濤川 黨

東京市麹町區下六番町一〇

(品 賣 非)

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番
株式會社

平

凡

社

電話九段

三三一
六四六
四七六
七五四
番番番

三協製本

共同印刷株式會社發行

第十三卷

政界 表裏 快談逸話 目次

昔の新聞と人	三
雄辯と雄術家	四三
演説の始まり	一〇八
演説の組合	一二六
言論壓迫の時代	一三五
講談と落語	一七五
書生芝居の回顧	二三四
舊劇の人々	二七一
藝人の襲名	二七七
福井茂兵衛を語る	二九二

財産差押を受けた日	二九七
河豚を食ふた日	三一二
吞象と鬼權の死	三二八
記憶を辿りて	三三三
議會の雄辯家	四八二
木堂翁の事	四八七
維新前後の名士と女	五〇八
岩崎の惚れた女	五一八
大浦のお慶	五三七
明治の俠客	五四七
歐洲見聞の儘	五九四

政界
表裏

快

談

逸

話

昔の新聞と人

偏狹て細心な島田

一國の文化の程度は、新聞の調子を見れば、すぐ解るといふことを聞いて居たが、それほどに、權威の有る、新聞を書く人、所謂記者先生の、責任の重い事は、今更に云はずもなである。

昔の新聞、と、今の新聞、それを比較して、日本の文化の進歩を測量するのも、頗る面白い事のやうに思はれる。併し、今の新聞の事は、別にいふ必要もあるまいから、此には昔の新聞と、記者の事に就て、大に紹介して見よう。慶應の昔、初めて今の雑誌體の新聞が、發行されてから幾年、明治の世になつて、著るしい進歩はした、といつても、今の新聞に比べたら、まことに幼稚なものであつた。

初めの漢驕草から、後の日新眞事誌に到る迄の状態は、極めて不整不備のもので、學校の校友會が、よく行つて居る。月並の會報なるものと、大差のない程度のものであつた。

それが進んで、東京横濱毎日新聞や、東京日日新聞の起るやうになつてから、漸く新聞らしいものになつて來た。更に郵便報知新聞や、朝野新聞、または、曙新聞の並び起つてから、大に新聞の調子も變つて、稍整ふたものになつて來た。

その間に、江湖新聞なるものがあつて、過激な議論を出して、評判のものであつたが、之れと同じものはいくらも

あつたが、多く永續きはしなかつた。

『毎日』は、初め本社を横濱に置いたのを、沼間守一が社長になつて、東京へ本社を移した。今の銀座に、カフェーライオンといふのが在る。彼處に、昔の本社は在つたのだ。

本社が、東京へ移つてからは、先年死んだ、肥塚龍を主筆として、盛んに政治論を掲げるやうになつた。

肥塚は、播州龍野邊の出生で、しばらく僧籍に在つた人で、どこことなく坊主臭かつた。文章は、際立つて巧い、といふほどではなかつたが、その時分には、相應に讀まれて、先づ第一流の記者であつた。

島田三郎が入社したのは、明治十五年からで、肥塚と代り合つて、論説を、書いて居た。肥塚に比べると、島田の方が、文章も上手であつたし、學問も出来る、といふので、遂々、主筆の株は、島田の手に奪られて了つたが、肥塚の爲人が、島田に比べると、ボンヤリして居たので、却て同人間の評判は、肥塚の方が良かった。

沼間が死んでから、島田が、社長と主筆を、兼ねるやうになつて、一時は『毎日』の賣行も、他の新聞を壓するほどであつたが、何分にも島田が、偏狹で、細心な上に、金錢に卑吝な爲め、社運は、年を逐ふて、衰へて行くのみならず、終に維持にも困るやうになつて、人手に渡すの止むなきに至つた。

島田の先輩で、且は恩人ともいふ可き、沼間の苦心した新聞を、無難作に賣渡した、といふので、島田に對する、同人間の非難は、随分ひどかつたものだ。

田中正造を見殺にす

島田の晩年は、頗る寂しいものであつた。曾て政敵として、横濱に選挙を争ひたる、加藤高明を、總裁に戴いて、憲政會の一員たりし事は、彼の身に取つて、無上の苦痛であつたに違ひない。

殊に、尾崎と共に、憲政會を脱退して、全く孤獨の境地に立つた時は、さらに一層の悲哀を、感ぜざるを得なかつ

た。

普選問題で、その主張の容れられぬ時、はやくも脱會す可き筈であるのに、不徹底な妥協でグヅ／＼して居るうちに、例の珍品事件から、止むなく飛出す事になつたのは、實に馬鹿らしい事であつた。

『内田信也の如き小僧は對手にせぬ』と、豪語しながらも、それが爲めの脱會では、矢張り内田の爲めに、逐出された事になる。彼の豪語も、畢竟は、牽かれ者の小唄に過ぎなかつた。

成金の小僧に、難癖を附けられたよりは、普選論の容れられなかつた方が、島田の爲めには、大切な事であらう、と思ふが、その大切な、問題の爲めには、敢て留黨して、却て小さい、成金小僧の排斥に逢ふて、始めて脱會するとは、實に恐れ入つた態度で、その不明も甚だしてある。

筆の序に、斯んな事もいふて、見たが、實は本文には、關係の薄い事で、甚だ失敬した。

島田は、幕臣の子で、本姓は、鈴木と稱したのであるが、横濱の區長をして居た、島田豊寛の娘に婿入りして、島田姓になつたのだ。その娘、即ち島田三郎夫人なるものは、抱車夫と通じて、家を出た。其處で、島田は、横濱の富豪、西村喜三郎の娘を迎へて、後妻にした。それであるから、今の未亡人とは、二十以上も、歳は違つて居た。

明治十四年の九月頃、大隈重信が、參議を免ぜられた時、島田も、文部省の役人を罷めて民間の人となつた。

始め、沼間に引ずられて、演説の稽古をした關係から、毎日新聞に入つて、その論説を書くやうになつたが、その頃から、島田の名は、漸く人に知られて來たのである。

爾來、沼間の配下として、また嚶鳴社の辯士として、長い間の政治生活、よくしゃべる人としては、廣く知られたが、さて島田の爲めに、どれほどの味方があるか、といへば、是れといふ人は、只だの一人もなかつた。

濱口内閣の遞相、小泉又さんは、長い間、その抱持をやつて居たが、トウ／＼大臣になつた。御主人であり、且先生であつた、島田は、大臣になり得ずして死んだ。人間の運不運は、實に判らない、考へて見れば、莫迦らしくもな

る。

遠く離れて、無意識に見て居たら、何となく潔白のやうにも思はれ、剛直の士のやうにも見えるが、その實、極めて薄ツペらな、コセ／＼した、厭な人であつた。

田中正造のやうに、一本調子な人を、思ふさま煽つて、足尾銅山事件の犠牲にしてつて、自分はいよ／＼といふ時に、知らぬ顔の半兵衛を、極め込んだ。本来からいへば、田中の骨は、島田が拾ふ可きであるのに、田中の晩年には、一顧だに與へなかつた。そのくせ、田中の葬式や、法事には出かけて、涙ツぽい演説をして居る。どうしても、島田は、偽善者であつた。

横濱に跋扈の商人派

明治廿三年以來、引續き横濱から、代議士に選ばれて居るから、誰れが見ても、衆望を負ふて居るやうに思はれるが、その實は、決して左様いふ事からでなく、これには、外に深い事情が、在つての事だ。

横濱には、貿易商を中堅として、本町外十三ヶ町の、實業家を以て組織された。商人派と稱する一團があつて、横濱の自治に就ては、何も彼も、此派の思ふやうに行つて居るので、その専横は、非常なものであつた。

政黨の色彩は、大隈派ともいふ可く、その中心人物は、多く改進黨員であつた。縣知事でさへ、此派の歡心を失へば、其の地位を、保つ事が出来ないもので、自然と、此派に阿諛するやうになる。多少の自由黨員は在つても、之れに對抗するほどの力はなく、長い間、商人派の専横は、續けられて居た。

明治廿一年に、市制が布かれて、二十二年には、市會議員の選挙が、行はれる事になつた。此時の知事は、沖守固と謂ふ人であつたが、平生から、商人派の跋扈を憎んで、何か機會があつたら、その勢力を打破らう、と考へて居た、矢先に、市會の選挙、此好機を逸してはならぬ、と思つて、ひそかに伏島近藏を招き、その内意を傳へた。

伏島は、豪快な氣質を有つた人で、疾く生絲商になつて、その直輸出を企て、之れが爲めに蹉跌して、身代限りの處分をうけた。その時に、第七十四國立銀行を利用して、澤山の金を借出して居たので、伏島の身代限りと共に、銀行も其影響をうけて大破綻をした。一時は財界の、大問題となつた位で、その整理を引受けたのが、例の大谷嘉兵衛であつた。茂木惣兵衛、原善三郎も、それに關係して、銀行は、漸く復活する事を得た。それが復た、先頃の破綻になつたのだから、七十四銀行の破綻は、今度で、二回目であつた。

此時、茂木惣兵衛は、はやく隠居して、保平と稱し、その伴が、二代目惣兵衛となつて、發狂して死んだが、三代目の惣兵衛は、名古屋から、養子に來た人である。原善三郎は、通稱を龜善といふて、今の富太郎の養父であつた。銀行の整理がついて、信用も回復されてから、三代目の惣兵衛が、また潰して了つた。まことに、不思議の因縁がある。

七十四銀行を喰潰して、身代限りになつた、伏島は、横濱の關外へ蟄居しながら、不毛の地を拓き、沼澤を埋て、新しい土地をつくり、ひそかに時機の來るのを、待つて居た。そのうちに、横濱も、追々に殷盛になつて來て、關内十三ヶ町では、人を容るゝ土地さへなく、繁昌の中心は、漸次と、關外へ移て來た。

其處で、伏島の所有地は、俄に價値を増して、數十萬の負債は、忽ち償還し得て、復權の身となつた。

沖縣令は、此伏島に眼をつけて、商人派に對抗す可き、一團の勢力をつくらせ、自分は、その蔭から絲を曳かうと、企てたのである。

商人派と地主派の争ひ

十幾年前に、身代限りの處分を受けて、日蔭となつて居たが、人の知らぬ間に、伏島は、關外の大地主となつて、その兒分も頗る多く養つて居た。宛然たる、地主王の如き、伏島が、關外に於ける勢力は、實に素晴らしいものであ

つた。

横濱の中央を、流れて居る大岡川、その川筋を境界として、早くから開けた、本町外十三ヶ町を、關内と稱し、その川筋から、外部の新開地を、關外と名づけて居た。昔は、此川の邊に關門があつて、出入の人を、幕府の役人が、誰何して居た所から、此稱が起つたのである。

どうしても、新開の土地には、殖民地らしい氣分があつて、萬事が雜然として、何の取締りもなければ、整ふても居らぬ。けれども、その賑やかな事は、はやくから開けて、大廈が軒を並べた町の、井然として居るよりは、却てすぐれて居るので、新に横濱へ来るものは、皆な關外の人になるから、その戸數も、日一日とふえてゆくのであつた。従つて、關外に在る人の、幾分か資産を有するものは、多く地主か家主であつて、その頭領ともいふ可きものは、伏島であつたのは、云ふ迄もない。

沖縣令の尻押で、伏島が、愈起つて、商人派に、對抗する事になつた。之れを地主派と稱して、政黨の色彩からいへば、商人派が、大隈系である爲めに、地主派は、自然に流れて、板垣系となり、是が、自由黨に傾いてゆくのは、止むを得ぬ事態として、見る可きである。

それから、といふものは、事毎に反目し、選挙とさへいへば、必ず血を流して迄争ふ。横濱の選挙騒ぎといへば、人が眉をひそめて、またかと、いふほどであつた。

此争ひから、幸福を得たのが、島田三郎であつた。商人派は、地主派に、對抗する爲め、内部の統一を謀るのが、最も必要な事であつた。代議士の椅子、一つを争ふ爲めに、自派の分裂を來し、市會や縣會に、多くの味方を出し得ないのは、不得策の至りである、といふ所から、代議士は、島田と極めて、自治の争ひは、市會と縣會に、主力を傾ける事になつた。斯くて、島田は、いつも商人派の投票を得て、安全に代議士たる事を、得て居たのである。

關内の有權者は、軒並びに在つて、關外の有權者の、飛び／＼に在るのは、同日の比較でない。商人派の投票

丈(だけ)で、充分(じゅうぶん)に出(で)られるのだから、島田(しまだ)は、いつも敵(てき)なしてあつた。その代(か)り、島田(しまだ)には、横濱(よこはま)の問題(もんだい)について、一切(いっさい)演説(えんせつ)をする事(こと)を、禁(きん)じて置(お)いた。議會(ぎぎ)の報告演説(ほうこくえんせつ)さへ、碌(ろく)にさせないのが、慣例(かんれい)になつて居(ゐ)た。

その後の状態(じやうたい)は、大分(だいぶ)變(かは)つて來(き)たが、それにしても、島田(しまだ)一人(ひとり)位(くらい)は、いつでも選出(せんしゅつ)し得(う)る、勢力(せいりき)は在(あ)つた。従(したが)つて、島田(しまだ)でもなく、誰(だ)れでも出(で)られるのであるから、島田(しまだ)の當選(たうせん)を以(もつ)て、衆望(しゅうぼう)の歸(き)する所(ところ)とするのは、大(だい)なる間違(まちがひ)で、單(ただ)に横濱(よこはま)の事情(じじやう)から、と見るのが、公平(こうへい)な觀察(くわんさつ)である。

滅茶々々になつた毎日新聞

近年(きんねん)になつて、商人派(しやうじんぱ)の結束(けつそく)も、大分(だいぶ)緩(ゆる)んで來(き)て、島田(しまだ)に對(たい)する投票(とうへう)にも、頗(さ)る異(い)しい影(かげ)が、うつるやうになつた。大隈内閣(おおくまないかく)の時(とき)でさへ、平沼亮三(ひらぬまのうさむね)といふ、若い人(ひと)に、島田(しまだ)の投票(とうへう)は荒(あら)らされて、すでに危(あや)うかつた位(くらい)で、若(わか)し政友會(せいゆうかい)から、若尾幾造(わかしきぞう)のやうな人(ひと)を推(お)して、他に適當(たうとう)な人(ひと)を推薦(ていせん)したら、島田(しまだ)は、確(たし)かに落選(らくせん)したのであつた。

死(し)に近(ちか)づいた、島田(しまだ)が、再び横濱(よこはま)から立(た)たぬ、といつたのは、さすがに、此間(こゝ)の消息(そくしき)を、少(せう)しは解(わか)つて居(ゐ)たに、違(ちが)ひない。

却(か)説(せつ)、島田(しまだ)の爲(ため)には、親分(おやぶん)であり且(かつ)恩人(おんじん)であつた、沼間(ぬまの)の遺物(ゐぶつ)たる、毎日新聞(まいにちしんぶん)を、島田(しまだ)は、引續(ひきつづ)き監理(かんり)しながら、相變(あひかは)らず書(か)いて居(ゐ)たが、遂(とう)々(とう)持ち切(き)れなくなつて、他人(たにん)へ譲(やう)り渡(わた)す事(こと)になつた。

それについても、島田(しまだ)は、少(す)くなからぬ金(かね)を握(にぎ)つた。平生(へいせい)は、社會政策(しゃくわいせいさく)を唱(とな)へて、弱者(じやくしやく)の味方(かた)なるが如(ごと)く、裝(まは)ふて居(ゐ)たのは、社(しゃ)を賣渡(うりわた)した、金(かね)の分配(ぶんぱい)が、甚(はなは)だ怪(け)しからぬ事(こと)になつて、社員(しやくいん)への涙金(なみだご)んといつては、よくないかも知(し)れないが、功勞金(こうらうご)んとか、慰籍金(ゐしきご)んとか、いふやうなものは、お話(はなし)にならねほどの少(す)いもので、その多くは、島田(しまだ)の懷裡(ふくろ)へ、ねぢ込(こ)まれて了(しま)つた。

社員(しやくいん)のうちには、不平(ふへい)を唱(とな)へるものもあつたが、つまり意氣地(いけぢ)のないものばかりであつた、と見(み)えて、大(おほ)きな騒(さわ)ぎ

にもならず、少しばかり吐き出させて、事は終結をつげた。

所が、沼間の未亡人から、訴訟が、起つて来て、島田の所爲を、法廷に於て、争ふ事になつた。

毎日新聞は、由緒ある新聞で、容易に他人へ、譲渡す可き性質のものでなく、假りに其事は止むを得ず、としても、一應は、沼間未亡人の了解を、得可き筈であつた。

然るに、島田が、獨斷を以て處分したのは、故人の意思に背くものであつて、殊に、新聞社は、島田の専有す可き性質のものでなく、依然として、沼間の相續人に、その所有權は在るのだ、といつて、すでに問題は、大きくなりさうであつた。

それを、沼間の友人や、島田の知己が心配して、仲裁にはいつた甲斐があり、どうか斯うか、その恥は、世間へ曝さずにすんだ。

また、井伊大老の爲めに、開國始末を書いて、曲筆舞文、その辯護料として得たものが、洋行の費用になつた事などは、あまりに世間へ知れすぎて居るから、此には省略するが、正直者の島田も、叩けば存外に、埃塵の立つ身の上であつた。

一と頃の毎日新聞は、相當に信用されたにも不拘、島田の爲めに、減茶々々にされて了つたのは、遺憾千萬である。殊に、沼間が、その社長であつた時は、政府者も、此新聞に對しては、頗る注意を拂つた位である。

假名垣魯文の才筆

昔の新聞記者を、追想する毎に、必ず思ひ出されるのが、假名垣魯文の事である。

今では、社會面の記事が尊重されて、どここの社でも、それに力の半ばを、注いで居るが、昔は一概に、三面記事と云つて卑し、その記者をさへ、別扱いにしたものだ。

編輯局を、上下の二部に分つて、三面記者の居る方を、下局と稱して、政治部の記者は、同じ編輯部に在りながら、三面記者を、蔑視して居たので、従つて、三面記事の振はざることは、實に甚だしいものであつた。

その三面記事を、面白く書いて、自然と、讀者を引付け、その結果は、新聞の賣行に迄、影響するやうにした、その最初の人が、假名垣魯文であつた。

柳亭種彦や、爲永春水の筆致に倣ふて、社會の出來事を、面白可笑しく書き立て、雜報の續物で、讀者を引付けるやうにした。魯文の苦心と努力は、決して忘れてはならぬ。

殊に、花柳種に、一新機軸を出して、やんやといはせた手際などは、今から思ふても、實に偉いものであつた。

近頃になつて、平氣で使つて居る、新聞熟語のうちで、藝妓を、猫と名づけたのは、魯文の筆からであつた。初めは寢子と書いて、それから、猫と改めた。粹な四疊半の樂み遊びに「しん寢子」なる文字を用ひ、或は新橋の花柳界が盛んになつて、碌に顔も知らぬ、客の枕席に、藝妓が侍するやうになつて、それを専門の女が、殖えて來た時、魯文は、之れを名づけて「不見轉」と稱した。

此才氣を以て、一般の三面記事や、花柳便りを書くのだから、實に面白い。果は、これを主としての新聞を發行した。於此、魯文の才筆は、愈認められ、一時は洛陽の、紙價を高からしめた『かなよみ新聞』が、即ちそれであつた。

それ迄は、新聞の文章に、振假名は使はなかつたが、魯文は、一切の文章に、振假名をつけたのみならず、多くは漢字を使はずに、平假名を用ひ、時として使ふ漢字は、大概の場合、魯文一流の宛字のみであつたから、文字の有るものが讀んでも、頗る面白いものであつた。

魯文の才筆が、從來の布告文を、一變させたのも、當時の事であつた。世間からは、戯作者上りの魯文として、猶ほ卑しめられて居たのを、横濱縣令の大江卓が、自ら其家を訪ひ、禮を以て、魯文を、縣廳へ迎へた。

それ迄の布告文は、御座候體の廻りく、いものか、否らざれば漢文崩しの、甚だ難解しいものであつた。それを讀み易い、通俗文に改めたのが、此時の事で、魯文は、布告を、書く爲めに、縣廳の雇吏になつた譯だが、他の役人が、多く士族であつた爲めに、戯作者の如き、卑しい者と、同席は出来ぬ、とあつて、縣令へ、抗議を申込んだ。

けれども、大江は、それ等の人に、一喝を加へて、ますく魯文を、重く用ゐた。魯文の名が、識者の間に認められたのは、此事からであつた。

新聞の賣行は素晴らしい

新聞の上に、都々逸や端歌、または川柳のやうなものを、掲載し始めたのも、魯文からであつた。

別號を猫々道人といふて、さかんに花柳便りと、俗謡の普及に勉めた。一部の人は、之を非難して、新聞の體面に關する、といふたが、後には、何處の新聞でも、平氣で、之を學ぶやうになつた。

小説風の續物が、魯文が、世の非難を厭はずに、始め出した。そのうちで、殊に評判を博つたのは『鳥追お松』と『青木彌太郎』とであつた。

非人の娘で、頗る美人のお松が、春の鳥追に出る。赤い紐の着いた、編笠を冠つて、三味線を弾きながら、市中を、流して歩く。それを、身分の在る人が見染めて、深い／＼戀に落ちる、といふ筋の事を書いたもので、大層な評判であつた。

『夜目遠目笠のうち』といふて、女を買冠るのは、左様いふ場合に、多く在つたものだが、殊に、美しい女の編笠姿は、何ともいはれぬ、趣があつたものだ。

昔からの因習で、すべての人から、卑しまれた非人の娘、しかし頗る美人のお松、それを取つて、續物の題材に使